

三 聞かず嫌ひ、知らず誇り

子供に食はず嫌がある如く、大人に聞かず嫌がある。子供は食うて見もせず、頭から嫌ひぢやと云ふ。聞いてみもせず、てんから嫌ひぢやと云ふ。聞かうともせず勝手に、恚んな者だと定込んで居る。「俺供が若い時は、鶏が能く歌うて時刻を知らせてゐたに、此頃の鶏は横着になつて、一向歌ひもせず欠伸ばかりしてゐる」と或老人は歎いた。奚ぞ知らん。鶏が鳴かないのでなく、自分の耳が聞えないのであらうとは。自分の耳の遠くなつたのを忘れて、鶏を責むるとは、ちつと方角違ではなからうか。「それや聞えませぬ傳兵衛さん」と云ふが、そんな事を云ふてゐるのが、餘程聞えないのだ。鶏を責むる前に自分の耳を改めよ。傳兵衛さんを虐める前に、自分の道理に暗きに驚け。

宋の代に張天覺と云ふ人があつた。張商英とも稱し無盡居士とも號して仲々の豪傑。或日寺に行つて大藏經を見れば、七千餘卷もある大部物が帙に入れて、立派に棚に飾つてある。自分の崇拜する著書は『論語』十卷位で、到底比較にはならぬ。癩に觸つて堪らない。早速家に歸つて物思に耽る。「何故、今夜に限りそんなに沈思なさるのです」と細君に聞かれ、「少し思ふ仔細あつて無佛論を書かうと思ふ」と答へるなり「既に無佛と云ふ、それなら最早論ずる迄もありますまい」と、鋒先を摧かれて、それきりになつた。後、友人を訪うてフト机上を見れば『維摩經』が載つてある。何心なく手に取つて一二枚讀んで見ると、なかく面白い。借りて歸つて眞劍に讀んで居る。「何を勉強なさるのです」と細君に不審がられ、「イヤ『維摩經』というて維摩居士と云ふが佛法を説いた書である。至極面白い」。「サーさう云ふ書物を好く讀んだ後無佛論をお書きなされたら宜しう御座りませう」。云はれて流石の張天覺も

慄然として。已來熱心に佛敎を研究し、非常な佛敎信者となり、心血を濺いで書著した書物は、無佛論でなくて、却て『護法論』三卷であつた。

佛法は聞かねば解らぬ。聞けば聞く程解つて来る。解れば解る程聞きたくなる。「佛法は大切に求むるより聞く者なり」。聞かずに居ては話にならぬ。